

社會と畫家

(玉成會總會席上) 岡倉覺三氏演說

余は社會と畫家の關係に就て一言せん。美術家は人たることを忘る可らず。社會も亦一の大美術家たることを記憶せざる可らず。畫家は筆を執り絹を染むるを以て足るべきにあらず。必ずや世道人心の機微に觸るゝ所なかるべからず。社會も李龍眠を生み馬遠夏珪を生み雪舟光悅を生みたる技倆あり、常に藝術家の母たるの本務を盡さざる可らず、然るに現在の情況に在りて社會と藝術家の調和其宜しきを得ざるもの如し。蓋し維新以降社會百般の施設に大變動あり、未だ新たな調和を生ずるに至らざるの結果に因るべしと雖も、其他にも亦原因なくんばあらず。

先づ畫家の方面より之を論ぜんか、畫家は技術の末に走りて根本的に世潮に觸るゝことを忘却する傾向あり、從て發展の局面大に閉塞せざるを得ざるは惜むべき現象なり。是れ分類の弊なり、專門より生ずる通弊なり、其弊の長ずるや清風明月と共に世人の一般に享受すべき美術を一種の專門家にて壟斷せんとするに至る。所謂繪の事は素人にては理解すべからざるものとなり、歌道に於ける古今傳受の如く畫道の秘訣と稱し流義の興義と唱へ、藝術を神秘の雲に蔽ひ去らんとす。歐洲に於ても十五世紀末復興時代の盛運を開きたる以前、伊太利小共和政府の畫家組合に於て此弊ありたり。我徳川中葉以後の流派の如き著しく分類割據の勢を逞しくせり。

歐洲に於ては十六世紀に於て美術の門戸開放せられ、近世繪畫の大飛躍を見るに至れり。本邦に於ては樂翁公時代より美術に復古の勢を生じ、繼で維新に至れり。諸豪族古社寺の名品廣く世人の耳目に觸るゝに至り且つは博物館美術展覽會美術學校等の開設となり、諸流派の元老中に於ても其秘訣を惜まず子弟に傳ふるに至り大に畫道の公開となり、明治新派の興隆を促すに至れるは喜ぶべきなり。然れども積弊の到る處今日に於ても分類の專門的の鐵壁を設けて、或は流派をいひ、或は主義をいひ、互に相排擠して美術の開達を障害するは惜むべきこととす。夫れ美術は個人主義の表顯ならずや。一流の元祖一主義の代表者は皆我より古をなすものならずや。雪舟は雪舟なり雪舟派にあらざる。應舉は應舉なり、寫生主義にあらざる。後の人徒らに其皮相を捉へて其衣鉢を傳ふと稱するは地下の古大家に累を及ぼして顧みざるの甚しきものなり。

藝術大成の手段として、古人の典型を研究するは宜し、古人の典型を以て終極の理想とするは古人の奴隸たるを自白するのみ。是れ一種の門閥自慢たるに過ぎず。彼の奈破翁の麾下の名將が佛國貴族の子弟に對して、我は我の祖先たりとの一言を以て酬ひたるが如きは、流派崇拜者の鑑みざるべからざる所なり。

然れども意識は分類に在りといへる如く、人は分類を好む動物なり、殊に今日科學的思想より來る傾向として、人は一切のものを分類せんことを愛せり、然れども今の科學は宇宙萬象を分類せりと雖も、宇宙の解釋を得たるものにあらず。彼の莊子の所謂宋人の函の如きものあり、各物を鞏固に區劃するはよこと雖も、大體に於て益する所幾何ぞ、所謂新派の人にして流派を排斥するものありても、典型主義性情主義自然主義等の名稱を以て自ら標榜するあり、是れ變體流派の樹立なり。是等主義の文字素より意味あれども、畢竟其傾向を示したるに過ぎず。大觀すれば孰か典型主義ならざらんや、孰か性情主義ならざらんや、孰か自然主義ならざらんや。主義標榜は自ら發達を妨止するの恐あるを知らざる可らず。

彼の近日獨逸哲學の一奇星たるニイチエの地位を評せる一警句にも、彼は既に分類せられたりと云へるにあらずや。



(上) 漫歩生

文部省を眼前に控へて、夫で中々盛んに開かれまじしたのは誠に嬉しいことでした。しかも若い人が頭を揃へて澤山にぞこぞと出されて、夫がいづれも研究したものであるのは更らに嬉しく感じました。さり乍ら此長所がある代りに、此會の中堅ともいふ可き人の作に目ぼしいものが無くて、人を引きつける力の弱いのはどういふものでせうか。いつも花々として、とても他に比較が出来ない程評判をさる此會が、例に比してじみで寂しいやうな感があるのは、一方に於て前に述べた長所があるせいでもありませうが、又一方には矢張り文部省の爲に多少食はれ氣味では無いでせうか。夫はともかくもとして、第一に感ずるのは岡田

和田二氏の作が漸く申譯的にあること、和田橋本二氏の作が無く有ても無いと同じやうなこと、之は兎に角寂しく感じさせました。只だ僅に黒田氏の作と、中澤氏の『霧』と、山本氏の『朝風』とで稍意を強うしたに過ぎませぬ。中澤弘光氏の『霧』は場中第一の大作で、又大作に相應した苦心の跡も見え、又夫丈成功したものと思ひました。谷川の流の中に裸體婦人が霧を吐き霧を呑むでゐる有様で、誠によく霧といふ趣が見えまじりました。見てゐると何だか煙くなつて自分も霧の裡に包まれるやうな氣がして、夫で冷々するやうな感じがします。之は確に此畫の成功した所とせう。又之をヌードとして見ると、霧の裡にあるので、肉色の説明が無く、裸體としての研究の如何程迄行つてゐるか分りませぬが、出來榮からいふと、全體に調子よく其目的を表はす丈の肉付も骨格も好く出來てゐます。只だ優さしい詩味のあるものに對して餘りに大きく威嚴を感じさせるやうな點はちとけがはれぬかと思ひます。夫から其威嚴——一方からいふと神といふ點から必要ならぬ——も好いがさて其表情の顔に至つて見ますと、折角の威嚴がすつかりそこで打こはされるやうです。之はモデルのせいもありませうが、餘りに人間の、又餘りに品格の無いもの出來てゐます。之はさうしてても残念でした。夫から今一つ難を言ひますと、霧の冷々とした心持が出来るのに今少し温い氣味を配合したら如何かと思ひます。霧のかゝらぬ岩などのあゝ暗く厭に感じさせず、今少し優さしく今少し温味を交せても霧の發生の原因と不調和なことも無からうかと思ひます。然し兎に角或る點迄は成功で、其骨折は誰しもの感受する所とせう。

山本森之助氏の『朝風』量からいつても、質から言つても確に前者と拮抗若くは勝つといふ位置にあるかと思ひます。然し其結果からかうは言はれぬもの、其作柄と苦心からいつたら矢張り前者に指を屈することを憚りませぬ。此圖は海邊の松に朝日がさして、影を地に落してゐると、遠く小波に日の光が輝いてゐるといふ、晴れらかな静かな畫です。松の描寫といひ、影といひ、明るみと言ひ、極めて明るくばつと眼を射る感じを起させ、誠に結構な作と思ひます。是丈成功したのには、誠に其平常風景作家として名ある丈と感服しました。然し之を其明るい氣味の美點を除外して、構圖と光線の上から言ひますと、少し物言ひがつけたくならず。夫は何かと言ひますれば、松の配置が餘り造り過ぎたやうで、不自然と迄は行かぬも、畫といふ氣味を思はせたとす。之は一つは松葉と其影とが餘りにくつきりと周圍を放れてゐるからかと思ひますし、又夫を呼ぶ原因の